

# 祝・第158回芥川賞受賞

## 若竹千佐子さん(遠野市出身)

第158回芥川賞(日本文学振興会主催)を受賞した、本市出身の若竹千佐子さん。昨年12月24日、市立図書館で開かれたトークイベントに出演し、受賞作『おらおらでひとりいぐも』に込めた思いと、自身の古里である遠野について語りました。イベントで語った内容を再構成してお伝えします。

### トークイベントで語った、若竹さんの遠野愛とは。

—本との出会いを教えてください—

(若竹)小学3年生の時、教室の学級文庫を全て読み終えてしまった私を、先生が普段は上級生しか入れない図書室に連れて行ってくださったので、「千佐ちゃんの本が好きだから入っていいよ」と。旧上郷小学校の図書室は締め切られていて、カビ臭く、湿っていたのですが、それが私にはすごく良かった。厳かな感じがして。その時、「おらの本もここに一冊あればいいなあ」と思いました。

—小説家を目指したきっかけは—

(若竹)子どもの頃から、小説家にな

りたいと、ずっと思っていました。本格的に始めたのは8年前。55歳で夫を亡くし、絶望的な気持ちになっていた時のことです。息子の勧めで小説講座に通い始めました。

講座では、私のような本を書きたいと思っている仲間と出会えたことが励みになりました。また、講師は吉本ばななさんや小川洋子さんを指導したこともある優秀な元編集長。この先生に巡り合えなかったら、まだまだぼんやり小説を書いていたと思います。夫の死を悲しんでいる自分を客観的に見つめることができるようになり、8年かかって『おらお

らでひとりいぐも』が生まれました。

—デビューで文藝賞を受賞し、芥川賞にも、受賞の感想は—

(若竹)30、40、50と歳を重ねるうち、もうだめかと思いつつも、夢を捨てきれずに頑張ってきた良かったと思えました。文藝賞で最終選考に残った時は、自分を見つけてもらったという喜びが、とても大きかったですね。

—作品に込めた思いは—

(若竹)東北出身で東京に暮らすおばあさんが主人公。夫との死別や絶望

を乗り越えて、ここで人生が終わってなるものかと、ひとりで生きることを前向きに捉えていく、女性の人生観や哲学を描きました。

題名は最初『桃子さん』。編集者から別名にといわれ考えていたら娘に「方言にしたらいよいよ」といわれ、『おらおらでひとりいぐも』に。宮沢賢治の『永訣の朝』の一文は「一人で死んで逝きます」という意味ですが、この小説では「一人でも生きていく」という女性の意思を表しています。

—作品に遠野井があふれています—

(若竹)主人公の心情を語る時に、標と安心してやらなくなるので、秘密にしておきたいと思います。自分を攻め立てないで、書けば読んでくれる人がいるということを励みにしたいですね。ものを書いたり、お話しをしたり、美味しいものを食べたりと、自由に一生懸命生きてやろうという気持ちです。

## 私は根っからの遠野人。 大好きな遠野を思い、書いた。

◎若竹千佐子さん(わかたけ・ちさこ)  
昭和29年遠野市上郷町生まれ。釜石南高校(現・釜石高)、岩手大学教育学部卒。県内で臨時教員をしていたが、結婚後、30歳で上京。主婦として2児を育て上げた。55歳の時に夫を亡くし、長男の勧めで小説講座に通い始める。『おらおらでひとりいぐも』が第54回文藝賞(河出書房新社主催)、第158回芥川賞(日本文学振興会主催)を受賞。現在は、千葉県木更津市に長女と二人暮らし。63歳。

【お知らせ】市は、若竹千佐子さんに遠野市民栄誉賞を贈呈することを決定しました。詳細は、あらためてお知らせします。

—若竹さんにとって、遠野とは—

(若竹)離れているからこそ、懐かしく、強く思い出される場所です。私の身に備わっているものは、遠野に脈々と伝わってきたもの。私は、六角牛山に住んでいた人々の末裔だと勝手に思っています。観光や旅行でほかを訪ねても、遠野の方が良いと思ってしまう、根っからの遠野人なのです。この作品は、大好きな遠野を思い浮かべながら、楽しく書くことができました。

—今後の抱負は—

(若竹)63年で1本ですから、次は100歳までには思っています。次の作品への構想はありますが、それを言う

### 『おらおらでひとりいぐも』 河出書房新社

74歳、ひとり暮らしの桃子さん。結婚を3日後に控えた24歳の秋、東京オリンピックのファンファーレに押し出されるように、故郷を飛び出した。周造との出会いと結婚、二児の誕生と成長、そして夫の死。「この先一人でどやって暮らす。こまったあどうすんべえ」夫の死後、それまで自在に操れるはずだった孤独が暴れ始め、ふるさとの東北井が頭の中で溢れ出す。震えるような悲しみの果てに、桃子さんが辿り着いたものとは――。

